

『源氏物語』の「すゞむし」考

——鈴虫・松虫轉換説再評価——

武山隆昭

はじめに

去る七月十九日に西暦二千年を記念して、式千田札が発行された。表の図柄には先進八カ国首脳による沖繩サミットに因んで「守礼門」が、そして裏面の図柄に『源氏物語絵巻』から「鈴虫二」の図の一部と「鈴虫一」の詞書の一部と『紫式部日記絵巻』から紫式部の顔が採用された。この図柄には、とかくの批評はあるようだが、日本古典文学に親しんでいる私としては、『源氏物語』を世界に誇りうる日本の古典として政府が積極的に世界に向けて発信したものと評価し、好感を持って受け止めている。

これを機にと、「鈴虫」の巻を読み直してみても、若い頃ここを読んで漠然と抱いていた疑問が再燃してきた。

それは、最も近い隣家から草深い山道を更に二百メートル以上入った中腹の一軒家に育った私が、生活の中で培った「秋に鳴く虫たちの習性」に関する知識に根ざしている。秋の夜、八時を過ぎて帰宅（もちろん徒歩）する時には、道の両側から「ガチャガチャ」「スイーツスイーツ」「ジージー」「チョンギース」「コロコロ」「リーンリーン」「チ

ンチロリン」と賑やかな虫の合奏が聞こえてくる。私の近づく足音に気付いたか真つ先に鳴き声を止めるのはいつも「チンチロリン」の声なのである。もう少し進むと「リーンリーン」が止める。「ガチャガチャ」は通り過ぎててもまだ鳴き続けている。このような毎年の経験から、最も「へだてごころある虫」は「松虫」だ、と思っていたので、『源氏物語』の記述はすなおに読みとれた。注釈を見る前は、ところが、旧古典大系(注1)の補注には、「昔の鈴虫は、今日の松虫である。いつ頃かに、名称と実物とが逆になった。直翅科の昆虫で、今日の松虫であるから「チンチロリン」と鳴く。」と書いてあり、私の頭は混乱したのであった。しかし、山岸大先生がおっしゃるのだから間違いないからうと自分に言い聞かせて、(自身十分納得しないまま)山岸説のように学生に講義してきた。

今回遅蒔きながら、自分なりに考察を加えてみようと思ひ立つた。先入観に囚われることだけは避けようと戒めながら。

一、問題の所在をもう一度整理

『枕草子』へ虫はの段には、「むしはす、むしひくらししてふ松虫きりきりすはたおりわれからひをむし蛭みのむしいとあはれなり……」(二巻本系(注2)弥富本)と、清少納言及び中宮定子の文学サロンの形成する女房たちの好みに叶う虫が列挙されている。もつとも、能因本では「す、むし松虫はたおりきりきりす蝶我からひをむしほたるみの虫……」(学習院大学本)と、松虫の順序が上がっているが、これでは鈴虫・松虫と併称される世間一般と同じとなり(前田本も同)、他の類聚段にみられる個人的配列からみて三巻本の順序を重視したい。まず最初にこの部分の諸注釈を概観する。(引用文中の……は、中略・以下省略を示す。以下同じ)

① 新日本古典文学大系、「鈴虫」いま言う松虫。」

② 萩谷朴著枕草子解環、「鈴虫」マツムシ科マツムシ。チンチロリンと鳴く。」

③ 田中重太郎著全注釈、「鈴虫」今の松虫をいつたらしい。チンチロリンと鳴く。」

他の注釈書もほぼ同様の説明で、松虫の項には「いま言う鈴虫」といった注がついている。ただ、新編日本古典文学全集のみが、『鈴虫』はそのまゝ現在の鈴虫と見る。リンリンと鳴く。」と注している。理由根拠は一切示していない。同じ著者の旧全集では、「チンチロリンと鳴く今の松虫をいうか。」となっていたので、この間の変化のプロセスを著者にお聞きしたいものである。

次に、古語辞典類の記述を見ることにする。

① 『小学館古語大辞典』「すずむし」〔鈴虫〕〔名〕松虫の古名。平安時代の鈴虫は今の松虫に当たる。「ちんちろりん」と鳴く。

② 『福武古語辞典』「すずむし」〔鈴虫〕〔名〕秋の虫の名。まつむしの古名といわれる。

③ 『角川古語大辞典』「すずむし」〔鈴虫〕〔名〕「一」虫名。①松虫の古称。季語、秋。②直翅目こおろぎ科の昆虫。……秋に「リンリン」と鳴く。漢名は金鐘児、月鈴児。中古・中世の文学作品に「すずむし」と見えるものは今の松虫で、「まつむし」と見えるものが今の鈴虫である（古今要覧稿、松虫鈴虫考）が、……やがて混同して今の「すずむし」をさすことになる。……

その他の古語辞典もほぼ同様の記述であるが、一つだけ独特の説明をしている。

④ 『岩波古語辞典』「すずむし」〔鈴虫〕秋の虫の一。リーンリーンと音高く鳴く。……▽今の松虫をいうとするは、江戸時代の古今要覧稿以来の説。

④に依れば、中古以来鈴虫松虫に呼称の転換は無く、江戸時代に一部の知識人が勘違いして逆を言っていたに過ぎない、ということになる。

古語辞典類の記述を当たるついでに、主な古辞書類にも当たってみたが、参考になる記述は見つからなかった。(『和名抄』『名義抄』になく、『下学集』等には「鈴虫ス、ムシ」とあるだけで何の説明もない)

ここで、問題の所在を整理する。「中古以来鈴虫松虫に呼称の転換は有ったのか無かったのか。有ったとすれば、何時頃からか」。本稿ではこの問題に納得できる解答を出すことを目標とする。

二、『源氏物語』以前の鈴虫・松虫

考察の方法としては、用例を集め、時代順に検討を加えるのが正道である。ところが、古事記・日本書紀・万葉集に用例が発見できず、平安時代に入つての「松虫」最初の用例は、昌泰元年(898)秋の亭子院女郎花歌合である。

萩谷朴氏編著『平安朝歌合大成』によれば、

12ながき夜に誰たのめけむ女郎花人まつ虫の枝ごとになく(読人不知)

とあるが、この歌で松虫の特徴を知ることが出来ない。これに対して、『夫木和歌抄』42321、^(注3)

昌泰元年亭子院歌合、女郎花

読人不知

女郎花をりとるごにまつむしのやどはかれぬとなくがかなしき

とある。これは、『平安朝歌合大成』の甲本・乙本ともに無いので、出所に問題があるかも知れないが、考察の対象にすると、「かなしき」と感じられるような松虫の声だということになる。(引用文の傍線は稿者、以下同じ)

次に、同じ『夫木和歌抄』5610（静嘉堂文庫本）巻第十四 秋部五、虫 に、

延喜七年亭子院御門御時、西河行幸せさせ給けるに、忠峰新和歌序云、ひるはひぐらし虫をもとめ、夜るはよもすがらさうのこゑをととのへしめ、あるときには山のはに月まつむしうかがひて、きむのこゑにあやまたせ、ある時には野べのすずむしをききて谷の水の音にあらがはれと云云

とある。『私家集大成中古I』の「忠岑集IV」（書陵部蔵）によると、

* 忠岑88 えんぎ七ねん、ていじのみかどの御とき、みゆきせさせたまひし……ひるは日ぐらし、むしをもとめ、よるはよもすがらそれのこゑをととのへ、しづめるときには、山のはに月まつむしうかがひては、きんのこゑにあやまたせ、あるときには、のべのすずむしをききては、たきのみづのおとにあらがはれ、ときはきりのまがひ、つゆにぬれしぐるるひは、いづれのとしのあきかしらざらん、……

とあつて、「谷」か「滝」かが一番の問題点である。（「そら」は「そう」（箏）の字形類似による誤であろう）

「きん」は、「琴のこと」のほうであろうが、「ツンテンシヤン」といった調子でメロディーを奏でるばあいの奏法なら、「チンチロリン」に近いと言えよう。それに対して、雅楽寮の合奏の場合のように箏の琴が和音を奏でる伴奏的な弾き方とすれば、「ポロンポロン」つといった調子で「リーンリーン」に近い。「谷の水の音」だと「チョロチョロ」といった感じで、「チンチロリン」に比定出来るが、「滝の水の音」の本文を採れば「ザーザー」という水音で、盛りを過ぎた晩秋近い鈴虫の「リーデー」と少し濁って聞こえる鳴き声とは似ていると言えなくもない。滝の大きさにもよるが。

屋代弘賢は『古今要覧稿』で「弘賢按に琴の声はチンチロリンといふに似て水の音はリンリンとなくにかよふべければこのころの称呼は、今諸国となふる所とひとしかるべし」と述べて、「水の音」の本文のまま、「延喜の頃はり

ンリンとなくを鈴むしといひけり」と断定している。しかし、逆も考えられるので、この段階での結論は差し控える。勅撰三代集には、「鈴虫」が古今0後撰1拾遺1、「松虫」が古今4後撰7拾遺4、といった具合いで、松虫の方が圧倒的に人気があった。もちろん「人まつ虫」のような掛詞で、歌にしやすいということもあろうが、松虫の鳴き声そのものが鈴虫以上に好まれたからであろう。（どちらの鳴き声が好ましいかは、主観の問題で決めたいが、音量の大きさホーン値からいえば、今の鈴虫の方が松虫の倍はあり、目立つことは確かである。）

萩谷朴氏は、先引の『枕草子解環』で、「歌題としては、松虫が古くから親しまれており、鈴虫を歌題に用いるようになったのは小野宮実資を中心とする一条朝の小野宮歌壇の趣向からである。」と述べておられるが、実資の伯父頼忠が、貞元二年（九七七）八月十六日「三条左大臣殿前裁歌合」を催しており、円融朝から鈴虫に関心が持たれ始めたようである。

十巻本（注4）によると、「……遣水の左右に前栽植ゑられたり。その中に、黄朽葉の籠に松虫をいれて、水の西の面なる岩のかたはらに据ゑ、赤朽葉の籠に鈴虫をいれて、下の岩の面に据ゑたり。……」という舞台装置で、主催者頼忠自ら、

いにしへを思ひや出づる鈴虫の草むらごとに声のきこゆる

と詠んでいる。その他、鈴虫を能宣、ひでき、松虫を兼盛が詠んでいるが特に両虫の個性が分かる歌はない。ただ、在原のひできの歌で鈴虫が露（水分）を好むことを知る。

鈴虫の秋のやどりは草むらに露やおくらむ声高く鳴く

（「スズムシの飼い方ガイド」には、「砂が乾かないように2日に1回はキリ吹きで水をかけます」とある）しかし、松虫も水を好む点は同じである（鈴虫ほどではないにしても）から区別の材料にはならない。

散文作品の用例は少なく、語彙総索引類で調べると『宇津保物語』に「鈴虫」二例、「鈴」二例、「松虫」八例あるが目立つほか、「鈴」が『かげろふ日記』で、兼家の作者に送った長歌の中に一例見られるのみである。一例を挙げる。

① 『宇津保』へふきあげの下（前田家本）

源宰相、（あて宮に）すゞむしをたてまつりて、

すゞむしのおもふごとなる物ならば秋のよすがらふりたて、なく（なケⅡ大系）

「鈴」と「振る」の縁語くらいしか取り立てて言うことはない。他も同様にすべて短歌中の用例で、虫の特徴の窺えるものはないが、一例だけ「鷹狩りの鷹に着ける鈴」に関連した用例がある。

② 『宇津保』へ楼のうへの下（前田家本）

「しろがねのこたかつくりて……みな、がらすゞつけたてまつり給」

次のも同様である。

③ 『かげろふ日記』へ上・天徳二年（兼家から作者への長歌）

「……あまたの人の ゑにすれば みははしたかの すゞろにて なつくるやどの ところにして ねぎめの 月の まきのに ……」（形容動詞「すずろに」との掛詞）（桂宮本）

右の②③から提起された問題として、「鷹狩りの鷹に着ける鈴」と「鈴虫の鳴き声」との類似を窺わせる用例を次章で検討することにする。

三、鈴虫と鷹狩りの鷹につける鈴

『新編国歌大観』から、索引で見つけた歌を挙げる。

①後拾遺267、綺語抄627、童蒙779、袖中抄368、歌色葉166

すずむしのこゑをききてよめる 大江公資朝臣

とやかへりわがてならしはしたかのくるときこゆるすずむしのこゑ

②月詣735、長方91

虫をよめる

中納言長方

すずむしをみかりのたかの音かとして野べのきぎすや草がくるらん

③夫木564、公基天3

天喜六年八月公基朝臣歌合、小鷹狩

読人不知

むらどりはいかがきくらむたかはなつかりばのをのすずむしのこゑ

④長能178

むし (入道中納言下らうにおはしける時)

みかりする人やことなるはしたかのとがへるのべのすずむしのこゑ

⑤永久百323

鈴虫

顯仲

すずむしの声をすずかと聞くからに草とるたかぞ思ひしらるる

⑥文保百544

詠百首和歌、秋

空性

夕されば秋のこたかの草とりに聞きまがへたるすずむしの声

⑦新明題和歌抄2152

秋、鈴虫

雅喬

暮るる野にきけば草とるはしたかのそれかとまがふ鈴虫の声

⑧漫吟1510

秋歌下、虫

契沖

鶉ふす野べにななきそはしたかの尾花がもとの鈴虫の声

⑨歌枕名6322

粟津野、鈴虫

源家長

あは津ののふかき草ばにかくろへてきぎす物おもふすずむしの声

『かげろふ日記』に、十六歳の道綱が鷹をわざと放つことを記しているが、鷹狩りは平安初期にはかなり盛んに行われていたらしい。鷹には、鈴を付けた。その鈴の音と鈴虫の鳴き声が似ているので、鈴虫の鳴き声を聞いて鷹が来たかと雉子や鶉が怯えるというのである。

鷹に付ける鈴に就いて、『廣文庫』の「たかがり」の項には「日本書紀、仁徳天皇四十三年……以小鈴著其尾……」

とあり、『古今要覧稿』（第百八十五器財部）の「鈴」の項に、「握拳云新鷹をやしなふては先鈴をかくる事なかれ又云すゞはちいさくして能く鳴をよしとす銅にてちいさきはくだけ易し鉄をよしとす鷹に付るにはすぎて高く付るは鈴すれて背中に瘡を生ずるもの也過て低く付れば飛時にさまたげあり、能頃を心得て付べし云々……」とある。また、「鈴押（すずのこ）」「鈴袋」「鈴板」などの小道具も用いられた。

右から分かるように、鷹に付ける鈴は鉄製の小さなものであるから「チリチリ」といった感じの音色であろう。特に、秋は「小鷹」を用いたというからなおさら小さな鈴でなければならぬ。

「リーンリーン」と聞こえる鈴は、鐸（大鈴）と呼ばれる寺の堂塔の四隅の軒に吊り下げる風鐸や、加持祈禱で用いる独鈷鈴や三鈷鈴のように、ある程度肉厚の重量のあるものである。従って、虫の鳴き声に当てはめれば、鷹につける鈴の音に似ているのは「チンチロリン」の方だということになる。

しかし、祈禱で使う独鈷鈴も振り方によって音色は変わる。手首を使って小刻みに速く振ると「りりりりーん」といった感じの音になるが、ゆっくり振れば「ちんちりちん」といった音にもなる。また、御詠歌講の御婦人連中は独鈷鈴に似た鈴を、器用に一振りで一回だけ「りーん」と鳴らす。それに、鈴にもいろいろな用途が^(注5)あって、どの鈴が「チンチロリン鈴虫」の命名由来に直接関係しているのかは、俄には決めがたい。とはいえ、鷹狩りの鷹につける鈴が鈴虫の鳴き声を知る有力な手がかりであることは何人も否定できまい。

四、鈴虫の鳴き方が推測できる用例

次に、『新編国歌大観』から鈴虫の特徴が推測できる歌を挙げて検討する。

まず『忠岑集』の二首から。(一)内の数字はおよその成立年代(西暦)である。

①忠岑139 (922) くれひら

さむきよはふるふふるふもななくにすずむしとのみなどかいふらん

②忠岑140 (922) ただみね

よの人のすずむしとのみいふことはこゑふりたててなければなりけり

〔声ふりたてて〕は、和影八二〇越前。「声ふりはへて」は、洞院百五五家長。にも)

「鈴」と「振る」の掛詞という平凡な技巧以上に、この二首からは力の限り羽を摺り合わせて鳴いている鈴虫の姿が浮かんできく。

③古今六帖3999 (982) 読人不記

すずむし

たまさかにけふあひみればすずむしはむつましながらくゑぞきこゆる

「むつまし」とは親近感を感じるということだろう。

④和泉集48 (1033?) 和泉式部

秋

すず虫のこゑふりたつる秋のよはあはれに物のなりまさるかな

晩秋近い夜寒の頃盛りを過ぎた鈴虫の「リーディー」と少し濁って聞こえる鳴き声は「哀れ」を誘う。

⑤新六帖2250

(1243)

すずむし

読人不記

すずむしのただなきにこそなかれぬれわがなるさまをおもひつづけて

⑥夫木5631・9151

(1310)

虫 正治元年新宮歌合

民部卿範光卿

ふりたててならしがほにぞきこゆなるかぐらのをかかずむしのこゑ

この二首からも力の限り羽を摺り合わせて鳴いている鈴虫の姿が浮かんでくる。

以上は、現在の鈴虫とも解することの出来る例であるが、その反対もありうる。

⑦亜塊588

(1490)

虫

飛鳥井雅親

すずむしの声は千種のはなやかになきいづるやどに月もまたれて

(春夢345、新明題2153 花やかになく鈴虫の声、とある)

⑧黄葉800

(1669)

暁虫

烏丸光弘

心すむあかつき露のふりはへてあはれ今めくすずむしのこゑ

「はなやか」「いまめく」は、④や次に示す

⑨挙白2075・2076

(1649)

木下長嘯子

草の原いづれあはれとききわかんわがなく声とすずむしの音と
きけばまづなみだふりそふこちしてうきかたみなるすずむしの声
とは相容れない性質で、⑦⑧は今の松虫の方が当てはまるかと思われる。

五、松虫の特徴が窺われる用例

次は、松虫側から考察してみる。

①古今200

(905)

題しらず

読人不知

君しのぶ草にやつるるふるさとは松虫のねぞかなしかりける

②後撰261

(951)

題知らず

つらゆき

あき風のややふきしけばのをさむみわびしき声に松虫ぞ鳴く

③千五百1491

(1201)

七百四十六番、右勝

家長

いまさらにもまくずがはらをわけよとやうらみがほなるまつむしのこゑ

④紫禁838

(1220)

同比、二百首和歌

順徳院

吹きむすぶはつ秋風の葛の葉にうらみそめたる松虫の声

⑤拾遺愚1545 (1233)

籬下聞虫

定家

みだれおつるはぎの籬の下露に涙色なる松虫の声

松虫の声に対しても、「悲し」「侘びし」「恨む」「涙」で捉えた歌が見られるということは、「秋という季節の醸し出す哀感」と結びつけたとき、秋鳴く虫は全て「悲しき」等と結びつく可能性があると云うことなのであろう。とすれば、これは区別の有力な手がかりにはならない。

次に、平安前期の歌を挙げてみる。

⑥中務244 (960)

(題詞なし)

中務

はるかなるやまなくなくとまつむしのそらにとぶひとみえにけるかな

⑦三条左大臣(頼忠)殿前栽歌合48 (977)

左大弁まさすけのあそむ

くきのねのみだれてにほふなかわけて千よまつむしのこゑぞのどけき

⑧実方179 (995)

山里にて曙にひぐらしの声を聞きて 実方

ほのぼのにひぐらしのねぞきこゆなるこやまつむしのこゑにはあるらむ

⑨拾遺集295、二条合21、兼盛79 (1005)

……叢の中の夜の虫といふ題を

平兼盛

ちとせとぞ草むらごにきこゆなるこや松虫のこゑにはあるらん

*明恵の「松虫のちとせぞといふこゑきくも」

⑦と⑨とは、権門主催の歌合の席で、千年の齢を保つ松の木と掛けて松虫を詠んだ例で、パターン化している。⑥の歌は、「空に飛ぶ火」すなわち「人魂」に見えたというのであろうか。乞ご教示。

⑧の歌は、蛸の鳴き声と松虫の鳴き声とがよく似ていることで、有益な材料である。「カナカナカナカナ」は、「チンチロリン」と「リーンリーン」のどちらに似ていると実方は聞いたのであろうか。しかも「ほのほのに」も考慮に入ればならない。すぐ近くで鳴く蛸は喧しくさえ感じるが、少し離れたところで鳴く蛸は、哀調を帯びて「カナカナカナカナ」と聞こえ、音程の高さの類似からして今の鈴虫「リーンリーン」の方に似ていると私は思う。

その他、いくつかの例を挙げて考察を続ける。

⑩夫木5600 光台院入道二品親王家五十首、尋虫声 参議雅経卿

ましてばしききてもとはむ草の原あらしにまがふまつむしの声

(明日井941)

は、草むらで複数の松虫が競っている趣で、草の上を「ザーザー」と強い風が吹く嵐に見立てている。

⑪夫木5608 百首歌、虫五十首中 藤原為顕

ことのねにかよふはみねの秋風をなほ松むしのこゑやそふらん

これは、前掲『忠岑集』の「山のはに月まつむしうかがひて、きむのこゑにあやまたせ」と同じ見立てである。『平

家物語』(巻六、小督)の明文「峰の風か松風か、たづぬる人のことの音か」を思い浮かべ、更に『拾遺集』(雑上)の「琴の音に峰の松風かよふらしいづれの緒よりしらべそめけむ」と⑩の歌を考え合わせると、「風↓松風↓琴の音↓松虫」という連想が一般的なものになっていた可能性が高い。時代は下るが、『うけらが花』にも同じ発想の歌がある。

⑫ うけら 569

(1802)

まつ虫

加藤千蔭

夕ぐれの風にきほへる松虫はたが爪琴の音にかよふらむ
時代の下りついでに、斎藤彦麿『傍廂』(嘉永六年「883」刊)を少し長いが引用する。

又、色黒くして首ちひさく、尻大にして脊すほみ、腹黄白色にしてリ、リンと鳴くを鈴虫といへど、これ松虫なり。そは松風の音に似たる故なり。おのれ若かりし時、遠江国秋葉山にて、松枝にさるひゞきあるを聞きて、あやししく思ひ居たり。そは年のくれの事なり。其後三河国宝飯郡の、小江の松原(稿者注「今のJR蒲郡駅付近)を春の中頃にやあらん。夜深く通りつるに、松枝に笛の如き音あるをあやしみ、しばしたちとまりて聞きしに、風の吹き来る音にまじりて聞こゆ。時にもより、品にもより、枝振にもより、風の吹きまはしにもよりて、まある事なるべし。さる故に、松風の琴の音にかよふと、歌にもよめるなり。たゞ、ドウくくとふく風の音のみならず、松に限るべからず。松風に限りにて、琴の音にかよふは、リリリンのひゞきある故なり。チンチロリンとなくは、鈴虫にて、鈴の音に似たり。

私は、宝飯郡の出身で小江の山一つ北側で生まれ育ったが、不幸にして琴の音にかよふ松風の音を聞いたことがな

い。しかし、昔から「松籟」といって風流の対象にしたのだから斎藤翁の作り話とも決めつけられない。現在の所、松虫命名の由来を最も合理的に説明している説である。

その他、松の木は「凜とした態度」で立っているから「リン」と鳴くのが松虫なのだ、という説もあるが、漢字に結びつけるなら、「鈴」の唐宋音は「リン」であるから、禪宗が入って来て唐宋音が広まった頃に松虫と鈴虫とが入れ替わった、という仮説も立てられなくはない。

松虫を胡蝶に見立てた歌を二首見つけた。

⑬ 続垂堯217

(1490)

松虫

飛鳥井雅親

たれかとふ月もよよしとすめる野やこてふににたる松虫の声

⑭ 逍遊2537' 同2773

(1677)

秋雑

松永貞徳

松虫は春にやはなく色色の花もこてふも秋にこそあれ

⑬の「こてふ」は「来といふ」と「胡蝶」の掛詞である。松虫の「リーン」を「こー」と聞いたのであろうか、声の方には私も自信は持てない。しかし、姿形の方は、大きく羽を広げて鳴く今の鈴虫の姿は、蝶が花に留まって密を吸いながら気持ちよさそうに羽を立ててゆっくり動かしている形に、とても良く似ている。今の松虫の鳴く姿は羽を広げはしても、今の鈴虫ほど丸くならないので蝶に見立てるのは無理である。⑭の歌も同じく、羽を立て広げて鳴いている松虫（＝今の鈴虫）を胡蝶に見立てたものと思われる。

六、動かぬ謡曲の二例

語彙総索引類で、「鈴虫」「鈴」「松虫」の用例を出来るだけ集めたのであるが、虫の鳴き声を擬声語で具体的に表現しているものは、謡曲以前には見つからなかった。それだけに、この二例は貴重である。

① 謡曲『松虫』より（旧大系謡曲下）

いろいろの色の音の中に、別きてわが忍ぶ、松虫の声、りんりんりん、りんとして夜の声冥々たり。

② 謡曲『野宮』より（旧大系謡曲下）

ただ夢の世と、古り行く跡なるに、たれ松虫の音は、りんりんとして、風茫々たる、野の宮の夜すがら、懐か
しや。

旧大系本の解説によると、『松風』は観世流写本の「元広本」所収で永正十四年（1527）の奥書がある。禅竹作かと言われ、一五〇三年の初演。『野宮』は、新潮集成『謡曲集』の解説によると、やはり禅竹作かと言われ、新大系も支持している。

世阿弥を中心とした能楽集団は、古典文学に造詣深く、源氏物語を下敷きとした曲において虫の鳴き声をわざと逆にするとは考えられない。よって、動かぬ例として重視する。

七、現在と同じ捉え方をした初期の文献

次に、現在と同じように、「リーンリーン」と鳴くのが鈴虫、「チンチロリン」と鳴くのが松虫であると解し、そう記された初期の文献を見る。

①『新增犬菟玖波集』（山崎宗鑑か、天文元年（1532）頃成立）

花の下にもまつむしのこゑ　口鬚をちんちりりと捻りたて

②『大和本草』（貝原篤信著、寛永六年（1629）刊）

スゞムシ、形西瓜ノサネノ如ク、扁クシテ、色黒シ、首小ク、ヒゲハ半白ク、二条アリ、……　其声清亮也、
秋ノ夜鳴也。

③『滑稽雑談』（四時堂其諺、正徳三年（1713）成る）

或云、ちんちろりと鳴物は松虫也、りんくくと啼は鈴虫也、又是を翻していへる説も有。又鈴虫とくつわ虫と、異名一体と云説も侍る。

④『和漢三才図絵』（寺島良安著、正徳五年（1715）跋）

松虫（まつむし）正字未考末豆無之△ ……褐色 ……夜振羽鳴声如言知呂林知呂林甚優美也

金鐘虫（すゝむし）俗云鈴虫△ ……真黒 ……夜鳴声如振鈴言里里林里林其優美不劣於松虫

この四人はいずれも上方文化（京阪地区）の影響を受けている。山崎宗鑑は近江の出身であるが京都で活躍した。

貝原篤信（益軒）は、福岡の黒田藩士であるが藩費で七年間京都に留学し以後も京の儒者本草学者と親交があった（若い頃江戸住まい経験あり）。四時堂其諺は、京都の俳人。寺島良安は、大阪の医家。

偶然かも知れないが、この事實は「方言周圏論」を鈴虫松虫呼称転換に適用したい誘惑に駆られる。すなわち、「文化の進んだ都」上方で言葉の変化が起こると、その変化は少しずつ遅れて周囲に伝播する、従って都から離れた所に

古い語形が残る」という理論である。元禄時代ごろから徐々に江戸に文化の中心が移りつつあったとはいえ、十八世紀初頭は文化的にはまだ上方の力が強かった。

たぶん室町・桃山時代頃に、「鈴」の唐宋音「リン」の普及（風鈴など）や、鈴の形状・音色・一般的用途の変化が原因で、京都では「鈴の音はリンである」という観念が広まったのではなからうか。それに連れて、「リーンリー」と鳴く虫の方を「鈴虫」と呼ぶようになったと思う。その反映が前掲①から④であると考ええる。

しかし、上方の学者の中には、この鈴虫松虫呼称転換に疑問を投げかけた人もあった。

⑤『幽遠随筆』（入江獅子童（昌喜）、安永三年1774刊）

（大和本草・和漢三才図絵を引用して）今其虫を見るに、形声ともに両書にいへるがごとし。しかれども其名付る所は、いさゝか不審なきにあらず。知呂林と鳴を、松虫といはんこと據なきに似たり。是はいつの頃よりか、流俗虫の名を取ちがへ、松虫を鈴虫といひ、鈴むしを松虫といひならはせたるを、考たゞさずして、其まゝしるせる成べし。一書云、松虫の音は松風の凜々とひゞきあいたるにたとへ、古人の名付しなり。ちんちろりと鳴は鈴虫也。法師のれいといふものをふる音に、よく似たれば也。……此説よし。

入江昌喜は、大阪の国学者である。現在一般的になっている両虫の呼称を事実として認めた上で、古人の名付けし命名の由来を述べてそちらに賛同している。

百年ほど？かかって、右の変化は江戸まで伝播していったようで、江戸幕府に故実家として仕えた伊勢貞丈は、つぎのように述べている。

⑥『安斎随筆』（伊勢貞丈、天明四年1784）

今江戸にては名をとり違へてリンリンと啼くを鈴虫といひチンチロリンと啼くを松虫といふは誤りなり

また、白河藩守で江戸幕府の重臣松平定信は次のように呼称の変化に当惑している。

⑦ 『花月草紙』（松平定信、寛政八[1796]享和三[1803]

今こゝにては、くろきをすゞむしといひ、かきのさねのごとなるを松むしといへど、もとはりんく〜となくはまつにて、ちんちろりとなく鈴なるを、あやまりにけりともいふ。むしうるかたへ行きて、松のを得んとおもはゞ、鈴のかたをといふなり。……

以下に、参照した江戸時代の随筆類を中心に、鈴虫松虫に言及しているものを、A説・B説に分類して掲げる。依拠文献は逐一明記しないが、『日本随筆大成』、『東洋文庫』、原書房、ゆまに書房などの活字本によった。

A || チンチロリンが鈴虫、リーンリーンが松虫 が正しい。 (*近頃取り違え逆になっていると指摘)

B || チンチロリンが松虫、リーンリーンが鈴虫 である。 (*昔は逆だったらしいと指摘)

- ⑧ 『年山紀聞』（安藤為章、文化元年[1804]刊） A *
- ⑨ 『北邊随筆』〈卷之三〉（富士谷御杖著、文化二年[1805]版） A *
- ⑩ 『文政八年句帖』（小林一茶）松虫や素湯もちんちろりん B
- ⑪ 『松の落葉』一の巻（藤井高尚、文政十二年[1829]序） A *
- ⑫ 『甲子夜話』（松浦静山著、一八二一〜一八四一執筆） B *
- ⑬ 『古今要覧稿』（屋代弘賢編、一八二一〜一八四二執筆） A *
- ⑭ 『古今和歌六帖標注』（山本明清著、天保二年[1831]刊） A *

⑮ 『桃洞遺筆』(小原桃洞著、小原蘭峽編、天保四年1833版)

A

⑯ 『傍廂』(斎藤彦磨著、嘉永六年1833刊)

A*

以上を概観するに、B説が一般に普及してもはやA説に戻すことは出来ないことを認めつつ、知識人は、中古・中世の和歌や散文作品を鑑賞する場合にA説を適用するべく啓蒙している、ということであろう。また、⑫⑬などで、あづまの人がBであるのに対して、上方の人がAを本来だと思っていると述べているのは、江戸方面では新しい呼称がすっかり一般庶民の間に定着したことを示しているよう。

八、『源氏物語』の「すゞむし」考

いよいよ『源氏物語』へ鈴虫の問題部分の解釈を試みる。五十年秋、光源氏は六条院の女三の宮の御殿の前庭を野の風情に造り変えて虫を放った。八月十五夜、源氏は女三の宮の御殿を訪れ、鈴虫の音を賞美しながら宮と歌を詠み交わす。本文引用は、新編全集による。(なお、大成の校異を見るにこの部分に重大な異文はない)

私も忍びてうち誦じたまふ阿弥陀の大呪いと尊くほのぼの聞こゆ。げに声々聞こえたる中に、鈴虫のふり出でたるほど、はなやかにをかし。

(源氏)「秋の虫の声いづれとなき中に、松虫なんすぐれたるとて、中宮の、遙けき野辺を分けていとわざと尋ねとりつつ放たせたまへる、しるく鳴き伝ふこそ少なかなれ。名には違ひて、命のほどはかなき虫にぞあるべき。心にまかせて、人間かぬ奥山、遙けき野の松原に声惜しまぬも、いと隔て心ある虫になんありける。鈴虫は

心やすく、いまめいたるこそらうたけれ」などのたまへば、宮、

おほかたの秋をばうしと知りにしをふり棄てがたき鈴虫の声
と忍びやかにのたまふ、いとなまめいて、あてにおほどかなり。

「いかにとかや。いで思ひのほかなる御言にこそ」とて、

こころもて草のやどりをいとへどもなほ鈴虫の声ぞふりせぬ
など聞こえたまひて、琴の御琴召して、めづらしく弾きたまふ。

この部分を論ずる前に、富永美香氏^(注6)の論考を紹介しよう。氏は、八王子市で両虫を飼育した経験から、若き日の私

と同様の松虫に対する習性把握をして、「松虫は確かに『人見知りをする虫』である。／人は寝て籠の松虫鳴き出でぬ 子規／ 句も示すように警戒心の強い昆虫で、昼は決して鳴かず、夜も人の気配などを察すると瞬時に鳴き止む。その音色は金属的でかん高い。逃げ足は速く、捕らえようとすると後肢で跳躍し、思いのほか遠くへ跳び、見失う。」これに対して、「鈴虫は、『心やすく、いまめいたるこそらうたけれ』で、『親しみがあつて陽気に鳴くのがかわいらしいものです』（全集口訳）とあるが、野辺でも庭でもかわらぬ音色を奏でることに心を寄せることばであろう。」と述べ、「呼称の転換はなかつたのではなからうか。」と結論される。

『昆虫図鑑』類の説明によると、今の鈴虫は「草むらの下の湿った暗い土の上に住む」とあるから元々身を暗くて低い安全な位置に置いて思いつきり大きく声振り立てて鳴くのであろう。対して「松虫は、雑木林の縁のススキなどの上に多くチンチロリンと鳴く」とあることから分かるように、草の葉に留まっているので敵の来襲には敏感に反応して身を守ることになろう。

右に引用した両虫の習性に鑑みると、「隔て心ある虫」が松虫で、「心やすき虫」が鈴虫であると結論づけるのが妥当なようである。心情的には、私も同感であると言ってこれで稿を閉じたい衝動にかられる。前掲の新編日本古典文学全集枕草子や小町谷照彦氏(注7)「呼称の転換があつたとは必ずしも断定できない」や片桐洋一氏(注8)「必ずしもはっきりしない」が呼称転換説に疑問を提示されたのは、この論の影響であろうか。

蛇足であるが、源氏のこころを踏まえて作つた歌がある。

調鶏296 (1856)

野松虫

井上文雄

さもこそはへだて心の虫ならめす野の原に誰をまつらむ

しかし、本稿三から六で考察してきた内容に鑑みると、「鈴虫は一貫して鈴虫であつた」と結論づけることはとうてい出来ない。特に、三の小鷹に着ける鈴は肉薄で小さいので「チリチリ」と鳴るはずである。六の謡曲の例に富永氏は触れていないが、これを無視してこの問題を論ずることは出来ないからである。能舞台で何度も（上方でも江戸でも）上演されたはずである。「野の虫の生態を知らない、京あたりの一部の知識人が勘違いをしていたに過ぎない」又は、「りんりんとしての方が調子が盛り上がるから」と言つて片付けてしまふのは強引にすぎよう。

ここで、今井祐一郎氏(注9)の論考を紹介する。私に論旨を要約したので了承願したい。氏は、『源氏物語』へ篝火の「弁少将、拍子うち出でて、忍びやかに歌ふ声、鈴虫にまがひたり。」に注目され、「歌ふ声」とは「唱歌」といわれるもので、〈手習〉で老尼が「たけふ、ち、りち、り、たりたんな」とはやりかに弾きたることばども、が唱歌の例だから、この唱歌は夕行・ハ行・ラ行音から成る譜である。これを基に推論すると、弁少将の唱歌に紛う鈴虫の声はT音R音を含む「チンチロリン」に近い音と聞き取られていたのであるまいか、と結論付けておられる。

今井氏の推理にも勇気づけられ、問題部分の解釈を始めよう。

秋好中宮が、秋鳴く虫の中で松虫を最高と考え、わざわざ遠くの野辺から良く鳴く松虫を採集させて六条院の西の町に放たせた。松虫を最高とするのは、詠歌の数からしても当時の一般的評価に従ったものであろう。この松虫が「しるく鳴き伝ふるこそ少なかなれ」というのは、松虫の習性を捉えたものと考えずに、たまたま西の町の前庭が松虫の生活にとつて環境が良くなかったから放つて間もなく鳴かなくなった、と解したら如何であろうか。「鳴き伝ふる」とは、「長期間続けて鳴く」と言うことだから、放つた直後は鳴いたことになる。しばらくは鳴いたが、三四日してだんだん数が減り、一週間ほどでほとんど声がしなくなった。餌がなかったのか、雄雌のバランスが悪く共食いをしたのか、天敵でもいたのか、おそらく共食いして急に数が減つたのであろう。それを「千年の寿命を保つという松の名をもらいながら短命な虫だ」と源氏は思った。人も通わぬ奥山などで声を惜しまず鳴くのは松虫に限らぬ虫の習性で、「だのに六条院の庭で鳴かないのはけしからぬ。分け隔てをして」という不満が「いと隔て心ある虫になんありける。」という言葉となった。

紫式部の実生活でも、自宅あるいは彰子邸などで、庭に放つた松虫が期待したほど（山野と同じよう）には鳴かなくて落胆した経験を持っていたのであろう。「六条院は人気が多いから、神経質な松虫は鳴かないのだ」と解したいところではあるが、現在の鈴虫を想定した前述の解釈で何とか読み取ることは出来よう。

次の、「鈴虫は心やすく、いまめいたるこそらうたけれ」を、新編全集は「気安く陽気に鳴くのがいじらしい」と口語訳している。「心やすし」を、飼育箱を覗き込んでいても平気で鳴いている今の鈴虫の習性を表した語と解し「親しみやすい」と口語訳したい気もするが、今は「チンチロリン」という鳴き声を「可憐で親しみやすい」と言ったものと解する。「今めいたる」は「現代風だ」の意味だから、「はなやかだ」「はでだ」といった感じの鳴き声はどちらかというに、明るいつ感じの「チンチロリン」の方だ、と言えないだろうか。

以上の考察から、『源氏物語』へ鈴虫の「ずむし」は、従来からの説の如く、「昔の鈴虫は、今日の松虫である。いつ頃かに名称と実物とが逆になった。直翅科の昆虫で、今日の松虫であるから「チンチロリン」と鳴く。」(大系注)と解するのが妥当ということになった。

むすび

なにか大山鳴動して鼠が一匹も出てこないような結論になってしまったが、ずっと引っかかっていた問題を、自分に出来るだけの資料を集めて考察したのであるから、納得している。次に、考察の要点をまとめる。

- 両虫の鳴き方が平安朝も現在も変化していないことを前提とする。(進化や突然変異は無かつたとする)
- ① 平安人も、「松虫」「鈴虫」を区別して認識していた。
- ② 「鈴虫」の名は、「鈴の音」のような鳴き声の虫ということと命名された。
- ③ 「鈴」は、用途・大きさ・形状がさまざまで、それぞれ音色が異なるから、どの鈴の音が虫の名に比定されたかはにわかに決定しがたい。
- ④ 平安初期から江戸時代まで、鷹狩りの鷹に付ける鈴の音と鈴虫の鳴き声との類似を詠んだ歌が多く見られる。
- ⑤ 鷹に付ける鈴は、鉄製の小さいものであったから、その音は「チリチリ」と言った感じであろう。
- ④⑤から、鈴虫は「チンチロリン」と鳴く今の松虫を称したものと思われる。
- ⑦ 室町時代の謡曲に、「松虫の音は、りんりんとして」などと出てくるのは、平安朝文学に題材を採った作品を多く作つた世阿弥グループの教養から見て信ずべきである。

⑧ 松虫を胡蝶に見立てた歌が二首見つかったが、これは鳴くときに大きく羽を広げ立てて鳴く今の鈴虫の形状にそっくりであり、今の松虫の方は丸くならないので、蝶に見立てるのは無理である。

*よって、平安時代には、チンチロリンが鈴虫、リーンリーンが松虫であったと結論する。

⑨ 十五世紀ごろ、京を中心とした上方で両虫の呼称が、逆になった。それは、歴史に残る大学者貝原益軒や寺島良安をも納得させる呼称であった。

⑩ 呼称の逆転の原因は、「鈴の音」の変化が第一であろう。肉厚で重厚な音色の風鐸などが普及したことが考えられる。(例Ⅱ鈴の屋の鈴) (松虫の方は鈴虫の変化のあおりを受けた形)

⑪ 「鈴」字の唐宋音が「リン」であることも観念としては原因に加わったか。

*よって、十五世紀中頃以降、チンチロリンが松虫、リーンリーンが鈴虫という呼称が定着したと考える。

(平成十二年九月三十日稿)

注

(1) 山岸徳平校注『源氏物語四』(日本古典文学大系17、昭和三十七年、岩波書店)の補注97。

(2) 田中重太郎著『校本枕冊子』(昭和二十八年、古典文庫)による。

(3) 『夫木和歌抄』をはじめ和歌の引用は、特に断らない限り、『新編国歌大観』(角川書店)のCD-ROM版による。

(4) 萩谷朴編著『平安朝歌合大成二』(昭和五十四年復刊、同朋舎)

(5) 鈴の用途を判明しただけ挙げる。「鷹に着ける鈴」を除く。

① 駅鈴Ⅱ今度は讃岐の守平正盛が、前対島守源義親追討のために、出雲国へ下向せし例とて、鈴ばかり給って、皮の袋に入れて、雑色が首に懸けさせてぞくだられける。(『平家物語』へ巻五、富士川)(新大系本)

② 仏具¹¹又、鈴ノ印ヲ結テフルニ、アリカタキ鈴ノ音シケリ。……文永ノ末ノ比ニヤ。胎藏ノ行法シテ後、鈴モフラスズシテ、礼盤ノ上ニシテ入滅ト聞ヘキ。(『沙石集』〈巻二の八「弥勒行者の事」〉(大系本)) (同巻八の二二にも三例)

③ 神具¹¹・真喜僧正とかやの、鼓の音・鈴の声に行なひを紛らかされて、「我もし六宗の長官ともなるならば、鼓の音・鈴の声長く聞かじ」と誓ひて、……拜殿の神楽を長く停められにけり。(『とはずがたり』〈巻四〉十月春日詣で(完訳日本の古典))

* 『御伽草子の浜出草紙』(旧大系本) * 謡曲『雨月』「さつさつの鈴のこゑ」 * 『梁塵秘抄』〈324頁〉も同様

④ 宮中の鈴¹¹・廿八日……又吉平読府、件府事不仰奉仕也、鈴奏聞、太后渡清涼殿……(『御堂閔白記』寛仁二年四月)

・内侍所も御鈴のをとはめてたく優なる物なりとぞ徳大寺太政大臣はおほせられける。(『徒然草』第三段(書陵部蔵十行古活字本))

⑤ 蹴鞠の鞠に着ける鈴¹¹鞠ける後、鞠にす、をつくる。(『天正狂言本』)

⑥ 廓で張見世をする合図の鈴¹¹夜店の気色古風を変へず。身仕舞済んで鈴の音聞へ、日暮れて後格子賑ふ。

〔平賀源内『根無草後編』(大系本『風来山人集』)〕

(6) 富水美香「鈴虫・松虫考―転換説への疑問―」(『お茶の水女子大学人間文化研究年報』第十八号、平成六年)

(7) 小町谷照彦「松虫と鈴虫とはいつごろ入れ替わったのか」(『国文学』平成五年六月)

秋山虔編『王朝語辞典』(平成十二年、東京大学出版会)「まつむし」の項小町谷照彦執筆。

(8) 片桐洋一著「歌枕歌ことば辞典」(平成十一年月、笠間書院)

(9) 今西祐一郎「鈴虫はなんと鳴いたか」(『新日本古典文学大系22』源氏物語四の巻末解説、平成八年、岩波書店)

(付言) 本稿は、名古屋平安文学研究会平成十二年八月例会(八月二七日於金城学院大学)で発表した内容に手を加え整理したものである。席上でご教示下さった、松田成穂、田中新一、田中喜美春、梅野きみ子、藤井日出子等の諸氏に感謝いたします。私の観察から出した、松虫が一番敏感で、すばしっこく捕まえにくいという意見に、岐阜金華山の麓にお住まいの田中新一氏、岐阜県坂祝町にお住まいの藤井日出子氏も、実体験から賛成して下さった。

(付言II) 十月二十六日付で国立国語研究所から公開された、論文データベースを検索して、松尾聡氏の「中古語としての『松虫』鈴虫」(『国語展望』84、平成二二、二二)のあることを知ったが、再校時までに入手できずにいる。